

テーブルを外し座席を増やしたライブハウス・プルミエ・ブラン。4人がそれぞれ招待状を送る相手を選び、チケットが届いたのは1週間前という無茶振りだったにも関わらず、空席はない。

微かなどよめきの中、開場前の注意事項説明がホールスタッフによりアナウンスされ始めた。『なお、公演中は演出の都合…』とお約束の説明があった後、一切の照明が消える。客席にも液晶由来の光漏れなど一切なく、正に完全な闇。

やがて、よく響く低音のストリングスからシンセサイザーの高音と、厚い音の波がホールの多方向を移動するように鳴り響く。同時に空間全体をイコライザーのように見せる演出の後、設置されているアイカツシステムのメーカーロゴが。

普段であればオペレーターはじめスタッフ以外は見る事が無い、アイカツシステムのスタートアップシーケンス。数々の権利表記が踊るように空間を舞う。そして低音のシンセサイザーを最後に音は消えていき、映像もフェードアウト。再び会場は闇に。

ややあって、ステージの片隅に置かれた白い小さめのグランドピアノがライトアップされる。ライトグレーのスーツ姿の痩身の男性が軽快に弾くのは『オールドランドマーク』のイントロ。オフヴォーカルで進行する中、不意に客席の一角にスポットライトが。仮面をつけたオーディエンスの1人が立ち上がると、仮面を外してその場で周囲にお辞儀をする。アンジェリカだ。ステージに小走りで向かいつつ、ハミングからジェームス・ブラウンのパートでコールをかけて客席にレスポンスを求める。ネタがわかった面々から徐々に「Old landmark!」の音が響き始める。

少しホールが温まったタイミングでアンジェリカが手を前にかざすと、そこには花の冠が。それを投げると、冠の通り道に色とりどりの花が咲

き乱れる極彩色の道が。暗いホールにあってそこだけ昼間のように。そして、冠は客席の中へ。頭に載せて立ち上がり、仮面を外したのは新。ふわりと浮き上がって妖精の羽を羽ばたかせると、花の道をステージへ。

新がステージに辿り着くや花の道や冠は消え、今度は新が客席に向けて掌の上にあるものを吹き付ける仕草をする。その先に青空と雲が。続くはアリーシャ。雲のひとつに飛び乗ってステージへ。

そこでステージの上に描かれたステンシルからホールの下奥真ん中に「お約束の」光が射すと同時に、ハレルヤのコーラスが。照らされた黒いスーツにサングラス姿の吾華音が一言、

「Idol...」

と呟いた。ネタがわかる面々からどっと笑いが起きる。

続け様にステージ上の3人が声を揃えて、

「Do you see the light!?!」

と。勿論吾華音は

「Yes! I have seen the light!」

と答えた。かの名画であればこの先のアクションは…なのだが、ここは教会ではない。目の前にあるのはステージに上る階段。しかし、吾華音はバク転で苦もなく階段を上がっていき、見事ステージの真ん中に立った。そして。

「アイドル…かつどー！」

とシャウトするや、衣装がマジカルコーデに瞬転。ステージもカラフルなキュート系のステージへ。そこから4人で『アイドル活動』を間奏つ

きショート尺で歌い切った。拍手の中で吾華音がMCを切り出す。一応の自己紹介とメンバー紹介、ピアノは実はアンジェリカのパパでしたな件(一部から大きな拍手)、そしてアイカツシステムの紹介へ。

「一部の方はどうしてわざわざ出したのかと思ったかもしれません。大半の方は初見だと思います。最初の映像と音響、アイカツシステムの起動演出なんですよ。お仕事でコンピューター使ってる方なら起動画面ご覧になってますよね、あれと同じです。実は専用の機材を使うと、さっきの起動演出流すだけで、映像音響機器どこがおかしいかだいたいわかります。豆知識です」

主に若い女性の声で「おおー」という反応。

「今日このライブハウスで使っているものは最新鋭のもので、さっきご覧頂いたように客席にも演出を持ち込めます。今までの機材だと手品のタネ明かしになるのでできなかつたんですが、今日は折角なのでご覧頂きました。新とアリサ、本当に飛んでいるように見えたでしょ？見えましたよね？」

吾華音がマイクを客席に。「見えましたー」の声を確認して「よし！」と。会場から笑いが起きる。

「どうやったのかは内緒です！ちなみに私のバック転は本当にやりました。なのでタネも仕掛けありません。もっとも、こういうのはアリサがずっと上手いので…お楽しみに」

会場から期待のどよめき。

「そうそう、アイドルのみんなで映画の仕事とかで使ったことない子はこれも目新しいかな、ちょっと味気ないかもですがフィッティングルーム通さなくても衣装替えできます。こんな風に」

と言って指を鳴らすや、吾華音の衣装がロリゴシックのクラシカルゴシックコーデに。発光エフェクトが無いものの、急な切り替わりでなく中間映像があるので傍目には服が変形したように見える。

「新しいシステムは面白いですね、エンジニアの血が騒いじゃいました。あ、フィットモーフライブラリはASDCのライブラリセンターにこの後登録しますので、関係者さんは是非使用感お伝えくださいね。さて着替えたので次の曲。…鮮血の誓い」

曲名を言った瞬間ライトダウン、直後の歌い出しのブレスに反応するかのようにステージ演出が始まる。ストリングスとともにハイトーンの歌唱。

『妖しの誘いに 応え給え』

夜の森、輝く獣の目、誰もいない洋館、雷鳴、紅い月…といったモチーフに、やや大きい動きとともに原曲より強いトーンで歌声を重ねていく。

デモンストレーションデータを作る時は声も似せるので、あまり聴いたことがある者がいない『素の』吾華音の歌声。アンジェリカとのボイストレーニングの甲斐もあり、未知の表現力を醸し出している。加えて振り付け。衣装と曲からイメージした即興だが、場数という裏打ちが生む迫力がある。

歌う間客席が静かだったため、若干不安を覚えた吾華音。しかし曲が終わるや拍手の波。スタンディングご遠慮だったため動きはなかったが、そこかしこもどかしそうにしている姿も見える。ほっとした顔で消えた照明の中ステージ袖に入った。

再びステージに照明が入ると、アンジェリカがギターを抱えて椅子に座っている。爪弾くことしばし、ステージ左右袖それぞれに当たったスポットライト、片側にオリエンタルリブラコードを纏う新、もう片側にローズパッションコードの吾華音。曲はチカチカ。新のリードで進む。

新の力量を気にしてか、吾華音は少し抑えめで歌っている。しかしサビ前のターンの時にちらりと見た新の目が、ファンを増やすきっかけとなった『あの目』になっていたため、振りのキレを意識させられる。

そして間奏。ギターソロに合わせて靴を鳴らそうとした吾華音の耳に高らかに響くカスタネットの音。新が両手打ちで鳴らしている。ステージプログラムに組み込んでいないので、新が自分で持ち込んだのだろう。その上で靴を鳴らしきっちりフラメンコを舞っている。

曲の締めも本来背中を見せる形で終わるところ、新はそのままターンし右手を胸元に添え左手を前に出す姿で止まった。開いた掌ごしに瞳が凜と開く様子がバックモニターに大映しに。

システムのメインカメラが新を追ったという事は、そちらのパフォーマンスが優ったということ。観客が付けている仮面にもフェブリスセンサーが内蔵されている。コードの差は加点しないようセットしたのは自分だったので、吾華音は驚きつつ妹の成長に胸を高鳴らせた。会場の反応が逆に誇らしい。

ステージ袖に入った時、新が言った。

「ターンが多い曲はフレアスカートの方が映えるよ、最後もスカートの動きを見せたかったの」

「あれえおかしいなあ、新がこの曲やるのプロデュースしたの、あたしなんだけどなあ…何故気づかなかった」

「だからわざわざ工夫したんだよ？これからお姉ちゃん存在どんどん知れていくんだから、お姉ちゃんのおかげって言われないように、自分

で光らなきや」

とても楽しそうに微笑む新。かわいい。うっかり見惚れる吾華音。

ステージの上では、ギターを変えたアンジェリカの横にアリーシャがカホンを持ってきて、その上に座った。「よっこいしょ」と言って軽く笑いを取る。すかさずアンジェリカ「どこの人だ！」とツッコミ、アリーシャは「おそロシアです！ってこわくないから！」発言。会場が沸く。こういう小さいネタはアリーシャが長けている。命懸けのパフォーマンスの空気を和らげるための必須スキルであるらしい。

「えっと、初めましての方が多いかしら？アンジェリカ・アルテミエワでーっす」

「アリサ・タルコフスキーでーっす。2人合わせて！」

「ユニットちゃうわ！」

「つれないねー。ねー。いつもこうなの」

流暢な日本語で完全に漫才師のノリ。客席から笑いが。

「やかましいわ。えっと、私達は召苗姉妹の従姉妹です。アリサはドリアカ所属の講師兼アイドルで、私は吾華音のブランド『フィーエ・ヴィーテラ』のデザイナーです。アイドルじゃありません。なので下手でもがっかりしないで聴いてやって下さいね。それでは『みつばちのキス』」

アリーシャがフットタンバリンを3回鳴らしたところで演奏が始まる。イントロのメロディはみつばちのキスだが、リズムが全く違う。首を傾げる観客がちらほらいる中歌い出し。

アンジェリカが口にしたのはフランス語。囁くように甘くコケティッシュに歌う。本気度の高いフレンチポップアレンジ。そして、明らかにエキスパートの犯行。オシャレなカフェにいるような雰囲気醸し出しつ

つ演奏終了。

「アーヤのカホンも上手なのに誰も気にしてないなあ、気の毒に」

「アンジェリカさん凄いね、もう女の子からも歓声貰ってる。若い子が行けるようなお店ではもう歌ってないよね？」

「うん、多分新規ファンだねえ…ヤバイかも私。さ、行こう」

ステージに戻る吾華音と新、今度は普段着。アンジェリカがギターを置いて、アリーシャ共々立ち上がったのを確認して、吾華音がfashion check!のヴォーカルに入る。あの大きなステージが奥行き付きで明らかにそこまで空間がないライブハウスに広がる。

裏周り担当は新。前の3人が展開したところで、先程の普段着からブリカジプリティコーデに衣装替えして出てくる。その後も曲の進行毎にコーデを変え、最後に最初の姿に戻るまで9パターン、4人で36コーデ。位置的に入れない筈のセットのボックスにちゃんと入るなど、アイカツシステムフル活用のパフォーマンスを見せた。

最後の集合でアンジェリカが「ごめん私これちょっと無理」と言ってしまう、皆が笑いを堪えたところでライトダウンで引き。拍手と笑いが入り混じる中、新がステージ下手側の客席の間に現れる。スポットライトに照らされたその姿は、銀とブルーメタの模様に黄色と赤のロゴマークの某エナジードリンクのブルゾンとキャップ、下はデニムのショーパンにハイカットのスニーカーという出で立ち。マイクを片手にMCを始めた。

「はい、ここから少しの間、趣向を変えてお送りします。皆さんはパルクールというスポーツをご存知でしょうか？自分の身体をありとあらゆるアプローチで駆使して、例えば障害物を乗り越えたりビルの間を飛んだりする、常識にとらわれずとにかく移動する、自由なスポーツです」

早くも会場がざわついている。

「そのパルクール界の有名人であり、スタントマンとしてこのブルゾンとキャップのですね！お馴染みのエナジードリンクメーカーとも契約している現役アスリートが今日！ここに来ています！今からしばし、エキシビジョンをお楽しみ下さい！」

既に歓声上がる中、新はキャップを手にとると、コールとともにステージ前方上に投げた。

「それではどうぞ、アリサ・タルコフスキー！」

彼女のファンにはお馴染みの曲、CHRIS MADINの『Free』のイントロと同時にステージに駆け出し、ステージ先端でバック宙をしたアリーシャは、空中でキャップを掴むと地面に背を向けたまま、ブランドの製品であるムササビシートで滑空し、身を起こして逆さまになった状態で天井の取っ掛かり…改装工事の際に彼女が希望した…に足をかける。

『I'm falling free in the wind, in the wind  
Free to be me in the wind, in the wind』

繰り返すフレーズが響く中、客席に手を振った後、足首からムササビシートのリングを外し(シートは巻き取られる)、髪を押さえながらキャップを被って、天井をステージ奥へと走り出した。そのままステージ奥の壁を転がったり客席間のパーティションの上で飛んだりホール左右の壁を走ったり。

『Into the free, into the me Into the ever knowing  
Felt so constrained, felt so to blame But now I'm breaking out and free』



常識的観念と、フィジカルと、物理法則。

まるでそれらから解き放たれたかのように(実際にはそれらを想像可能な範囲外で活用しているのだが)アリーシャは舞う。

途中、新の手を取って一緒に走り出し、新の身体を跳ねあげたり新に飛ばしてもらったりしながら会場中を走り回る。曲の終わり際にアリーシャは階段下から、新は階段上から階段の中央と飛び込み、しゃがみ姿勢になったアリーシャの手を「いっけーえ！」と声を出しながら落下の力を込めて新が思い切り叩いた。高く舞い上がったアリーシャ、空中で宙返りをし再び天井に足をつけ、最後『I'm free...』の歌詞のタイミングで2人は天地で対称となるポーズを。

ホール内の照明が点き、アリーシャはステージ側にジャンプ。そこに駆け寄る新、マイクを手にして…

「アリサ・タルコフスキーと」

「アシスタントはアラタ・ショウミョウでした！スパスイーバ、アラタ」

新の手を取り高く掲げ、もう片方の手を振るアリーシャ。盛大な拍手の中、吾華音とアンジェリカもステージへ。4人とも同じ姿。

「ええー、アリサってあのアリサだったのー？びっくりー」

「アカネ、棒読み口調ヤメレ」

「冗談はさておき、私のブランド『フィーエ・ヴィーテラ』は、ファッションブランドというよりは今のところ装備のブランドです。今回のですと、この高耐久ブルゾンとか、軽いけどソールもアッパーも安全靴の基準を満たしてるこのスニーカーとか。レッ◯◯◯さんとダンスフュージョンさんとの三角コラボになります」

吾華音が説明している間に、アリーシャが自分のキャップのつばにサイ

ンを入れ、客席の歓声が多い方向に投げる。皆マナー良く座っていて、贈り物は観客の女性の膝の上に柔らかく落ちた。視線を上げた新たな持ち主に、アリーシャはすかさずウインクと投げキス。さらに歓声が。

「見えてないけどインナーと、あとはなんか想定外の使われ方してたムササビシート、新のボディバッグはうちの製品で、アンジェリカとアリサの共同開発です」

「あ、このショパンは、今日の私のコーデにご協力下さっているボヘミアンスカイさんのものです。ショップで売っているものですので、気になった方は是非！姉のブランドとのコラボバッグもありますよ！そらさんいつもお世話になっています！」

新は客席の何処を見るときもなく深々とお辞儀を。吾華音が続ける。

「私たちのブランドが手掛けているのは、頑丈で信頼性が高く、しかし動きを妨げないアイテムです。ブランドドレスの靴だけや要所の内側だけの仕事もやらせて頂いています。後は、アリサが使いたいものを作って、成功事例が定数出たものと同じもののオーダーを受けたりもしています」

「素材工学などの検証をアリサが行い、私がパターンを起こしていますが、他ブランド様からのオファーもお待ちしております。特にアイドルの皆さんに、安全で自由度の高いアイカツ環境を提供できれば…という狙いで発足したブランドですが、エクストリームスポーツのアスリートさんのオファーも歓迎です。信用に値する理工学物理学のドクターがメンバーですので」

客席の一部から拍手が。一般のファンには、アリーシャの正体が3分野の博士号を持つ学識経験者だという事実は隠してもいないが開示もしていない。スポンサー筋からだろう。

「量産品のベース開発もお受けしておりますので、興味のある方は今日のフライヤーに添付の連絡先までどうぞ。ちなみにアイドルとしての私

へのオファー先も同じです、新人ですがよろしく申し上げます♪以上、ブランド紹介のコーナーでした」

ステージ奥に引く年長3人。

入れ替わりに、先程お辞儀の後でステージ裏に引いていた新が、四ツ星学園出向中に着て気に入り、納入先から仕入れたノーマルドレス…カラフルエスニックコーデで現れる。

「えっと。いつものアイカツと違って、今日は何を歌ってもいいよと言われたのですが、いざそう言われると決められない！そして実際やってみたらどちらかというとバンカツっぽい！」

客席から笑いが。

「準備期間は1ヶ月程でしたが、凄く勉強になりました。一人々々にお礼を言いたいところですが、今日は私は脇役なので。そう思って、歌で感謝の気持ちを伝える事にしました。大好きな映画の主題歌です。聴いてください『会いたかった空』」

歌の進行と共に、背景には吾華音と霧矢あおいの秘蔵フォトライブラリーから新本人のセレクトによる写真が。間奏までの背景は写真と草原と青空だったところ、間奏明け直前にライトダウンし新にピンスポットが当たる。そこからが新の挑戦だった。マイクを持つ腕を下げ、息を大きく吸う。

『いつもいついつまでも共に生きると誓いたいこの場所で』

マイクなしピアノ伴奏のみで一節を歌い切る。舞台袖でアンジェリカ「80点をあげよう」と小さく微笑んで一言。システムチェックに訪れた日にアンジェリカのマイクなし発声を聴いて感激した新は、翌日から熱心にボイストレーニングを受けていた。この12秒と、ラストの11

秒のために。

伴奏が戻った瞬間に、背景の草原が一面の花畑になり、たくさんの花卉が風に舞う。そして大サビが終わり、風の演出が止み空は夕焼けに。マイクを後ろに組んだ手で隠した新、目の前の誰かに語りかけるように。

『今ここにいる あなたの目が すき』

静かに目を閉じる新。背景が消え、ピンスポットになり、それもゆっくりと消灯。客席から僅かにすすり泣きの声、直後に大きな拍手。

「トリ控えてるお姉ちゃんを泣かしてどうするの新〜てゆうか霧矢あおい恐るべし…」

「アカネちょっと黙ってて。うう、やり辛い」

「あ、アーヤ。張り合って歌い出しマイク使わないとかしないように。直後の伴奏強いからバランス悪くなる。プロなら仕上がり重視！」

「はい」

ちょうど戻ってきた新の姿を見て、微笑んで右手を挙げるアリーシャ。そのままハイタッチ。

「よかったよ、すごく」

「アリサちゃんも盛り上げて、次の曲に繋ごう！」

「おう！まかせとけ！」

大きく深呼吸をすると、アリーシャが小走りでステージに入った。客席に向き合うや自然な笑顔。場数に由来する、緊張を捻じ曲げる精神力で不安を覆い隠す。しかしあえて、包み隠さぬ言葉を。

「アラタ、さっすがアイドルですよネー。アカネより落ち着いてるかも。実はアタシより。いやー実はねー、柄にもなく緊張してるの。ブル

ジュ・ハリファの先端で撮影した時のが余程落ち着いてたネ、ほんとだよ」

背景にその時の様子が。世界一の高層建築のてっぺんで、片手に自撮りカメラつきの棒を持って片手で逆立ちしているアリーシャの姿を、地上から長尺のズームレンズで追う映像に会場がどよめく。

「日本に来て、みんなと居て、何が今アタシにとって大事かよくわかったの。だからアタシも、今日はその気持ちを歌に載せるよ…

『海外から来てくれたみんな、今日は日本語の歌だけなの、ゴメンね』

←英語で

自分で言うのもなんだけど、ちょっとびっくりさせちゃうからね！

『Buddy』」

すっ…という引きブレスの音と同時に照明の色が変わる。

『そこに何かあるとしても 未開の領域へ 君と』

ファルセットを使い分けた綺麗なハイトーン、しかも会話よりずっと明瞭な日本語でソロパートを歌い切る。客席のアイドル勢アスリート勢が目を丸くする中、疾走感のある伴奏へ。

複雑なリズムと音程が交錯する特異な進行を、少し大きい振り付けを交えて歌いこなしていく。先程のエキシビジョンで身体で見せた躍動感を歌でそのまま聴かせるかのような、大胆かつ繊細な歌唱。

『君の翼になる 私が』

客席に手を差し伸べるような振りで歌うと、アウトロを華麗に舞って締める。止めのポーズに大きな歓声が飛ぶ中、余韻を残しつつ照明が明るくなった。ステージ袖から駆け込んでくる新。今度は観客の前で両手でハイタッチ。

「アリサちゃんはドリアカで先生もしていますが、もしかしてドリアカの生徒さんでも歌を聴くの初めての人、いらっしゃるんでは？」

「てゆうか、歌の仕事今回が初めてだし。やってみてわかったけど、自分のカラダとその使い方って意味では、歌もスポーツみたいなものだヨ。伝えたいことあってもカラダついてこなきゃネ。みんなフィジカルトレーニングもがんばろう！」

「さて、お姉ちゃんのデビューステージでハードルをどんどん上げていく私たちですが、続いてはアリサちゃんとデュエットです！」

「ユニット名は！」

「Синий флэш(シニーフレッシュ)・カッコカリです！」

「ええっユニットあったの!？」

自分で言い出したアリーシャの反応に、客席から笑いが。

「このところ、ずっと思ってたの。でも学園長とかにお許し得ないといけないし、アリサちゃんは私がライバルだって言うから、ここで言っちゃってノリで押し通しちゃおうかなって…わあ！」

最初笑顔だったアリーシャの表情が、えっ、という顔、そして瞳を潤ませて感情を押し込める顔に。不意に、アリーシャが新に抱きついた。震える声で言う。

「カッコカリ、いらないよ。シニーフレッシュ、素敵、青い閃光。アタシにピッタリ、アタシのなかのアラタにも。ボルショエスパスイーバ…(本当にありがとう)」

「泣かないで、アリサちゃん。早速ユニットデビュー曲だよ！」

「ダー。ダターギブツ(うん、頑張る)」

アリーシャは嬉しさのあまり日本語が出てこない有様。少しの静寂の後、身体を新から離して客席側を向いた。まだ涙目、しかしいい笑顔。

「それじゃあ行くヨ！『So far, so near』…みんなちょっと静かにネ」

横で新が口の前で人差し指を立ててウインクしている。やがて照明が落ち、2人に暗めの青のスポット、奥のピアノに色温度若干低いスポットが。ピアノからイントロが奏でられ、ストリングスが重なる。そしてピアノソロから一旦ミュート、歌い出しは新。

『僕らに見えてるのは今あるここだけ…』

曲の進行に合わせて伴奏が増えていく。コーラスパートで年長の2人が合流すると、サビからは2人のヴォーカル。

『飛んでみせるよ Try Try Try きっと見にいこう』

リードの2人のハイトーンに、コーラスの2人のハイトーンが綺麗に重なる。1サビを終えて再び新ソロからの同進行、今度は間奏前の澄み渡る英語ソロパートをアリーシャの歌唱で。

『Even though it seems so far and far away, maybe it can be so near..』

歌い切るや曲の途中であるにも関わらず拍手と歓声が。間奏を経て歌は続き、ラストの英語ソロも高らかに歌い上げた後、最後は4人コーラスからピアノの駆け上がる旋律、そして最後の低音の打鍵と共にライトダウン。暗い中でも大きな歓声が上がっている。

やがて歓声が静まったタイミングで、ステージの一点にスポットが当たった。

